

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

平成23年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第11号（2月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jppn.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
（農薬安全使用基準の遵守）
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
（周辺住民等への危被害防止）
（河川，湖沼，海などへの汚染防止）
（養蚕，養蜂などへの危被害防止）
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

農薬ラベルを確認しましょう。

農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

平成23年度病虫害発生予報 第11号

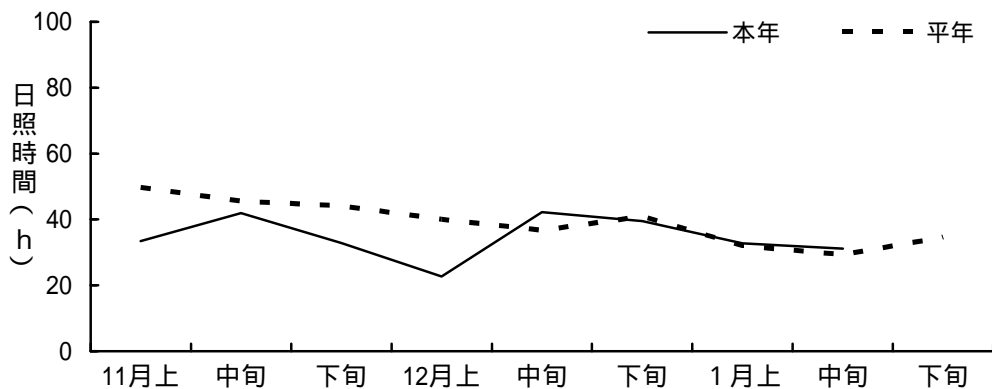
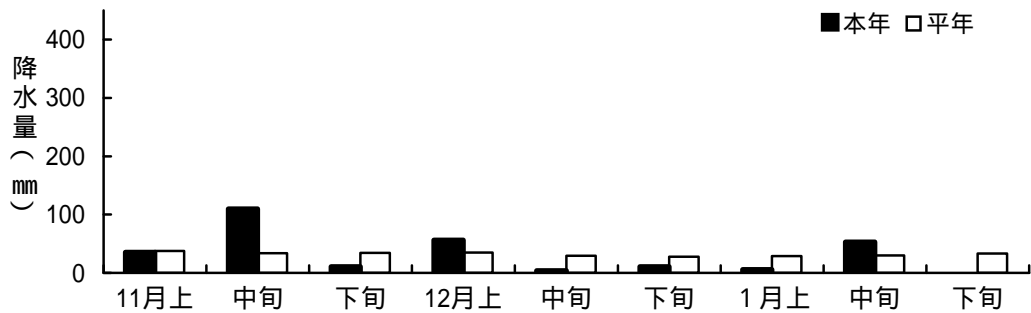
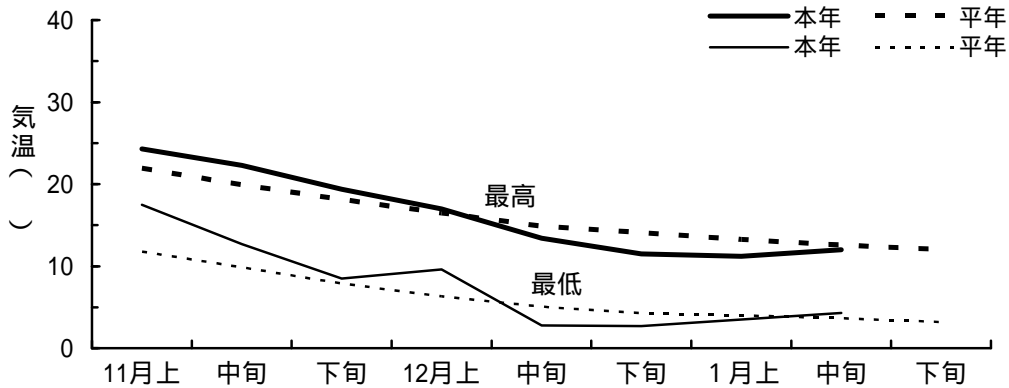
平成24年1月31日
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

. 向こう1か月の予報(1月28日から2月27日) 平成24年1月27日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率(%)			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	50	30	20	九州南部では平年と同様に晴れの日が多い。 奄美地方では、平年に比べ曇りや雨の日が多い見込み。
	奄美地方	40	40	20	
降水量	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	40	30	30	
日照時間	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	40	40	20	

. 11~1月の気象情報(鹿児島地方气象台 観測点:加世田)



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	べと病	並	並
		褐斑病	並	並
	トマト	灰色かび病	並	やや多
	ピーマン	斑点病	やや多	やや多
	イチゴ	うどんこ病	並	並
		ハダニ類	並	並
	施設野菜類共通	アザミウマ類	並	並
		コナジラミ類	並	並
	エンドウ類	アザミウマ類	並	並
	ジャガイモ	疫病（奄美地域）	やや多	やや多
花き	キク	黒斑病・褐斑病（県本土，施設）	並	並
		”（奄美地域，露地）	やや多	並
		アザミウマ類（県本土，施設）	やや少	少
		”（奄美地域，露地）	やや多	並～やや多
茶樹	チャ	カンザワハダニ	やや少	やや少

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

野菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

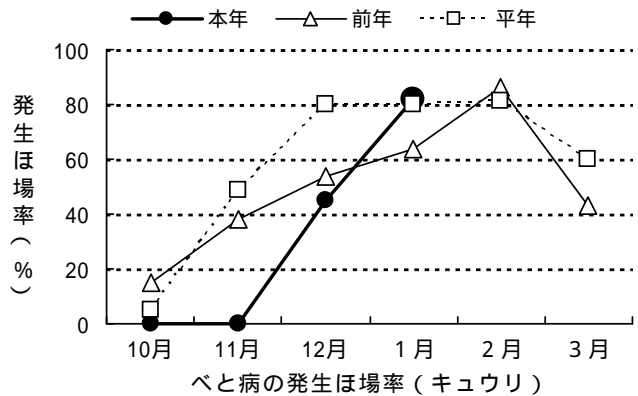
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率82%（平年80%）：並
発生程度の高いほ場が認められた（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生，進展が助長されるので，多湿時（特に結露が多い場合）は強制的に加温機を稼働させ，湿度低下を図る。
- (イ) 発病葉は早めに除去し，ハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので，適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので，発生初期の防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) 褐斑病

ア 予報内容

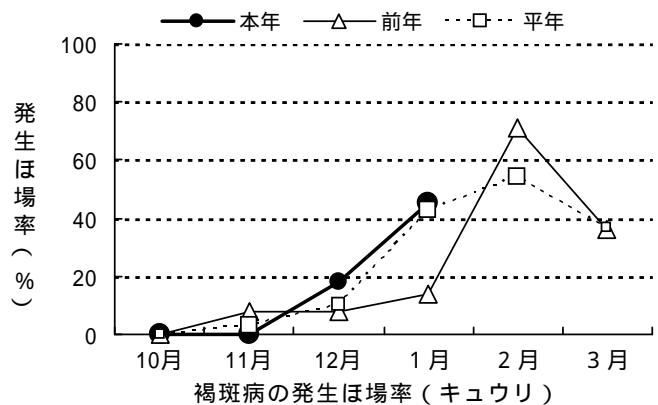
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率45%（平年43%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 高温多湿条件下で発生しやすいので，ハウスの通風換気に努める。特に2月下旬以降の晴天日は，ハウス内温度が急激に上昇するため，こまめに換気を行う。
- (イ) 発病葉は早めに除去し，ハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 窒素肥料の過度な施用は発生を助長するので，適正な肥培管理に努める。特に茎葉が繁茂する生育中～後期に多発する傾向があるので注意する。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので，発生初期の防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け，作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. トマト

(1) 灰色かび病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

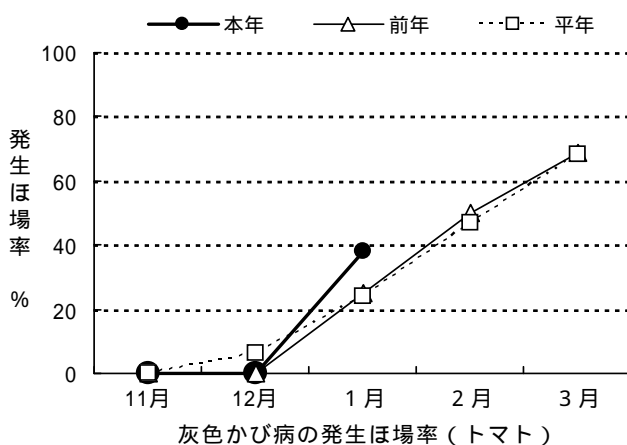
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率38%

(平年24%)：やや高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) 収穫果房より下の摘葉はこまめに行い、果房付近の風通しを良くする。
- (ウ) 果頂部やへたの付近に付着する花弁はこまめに除去する。
- (エ) 発病果実は早めに除去し、ビニール袋等に入れてほ場外へ持ち出し処分する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



3. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

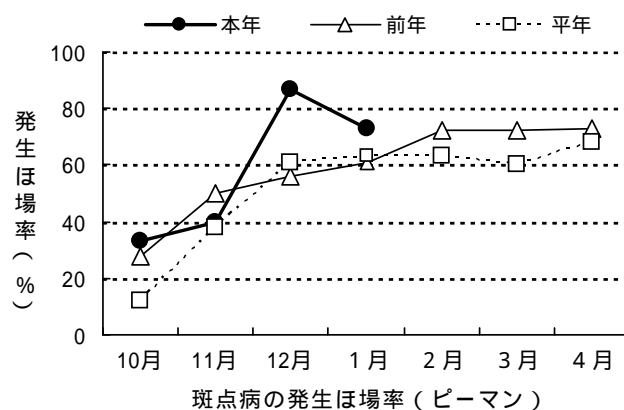
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率73%

(平年63%)：やや高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



4. イチゴ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率29%

(平年28%)：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 新葉の葉裏に発生しやすい。観察を

こまめに行い、早期発見と初期防除に努める。

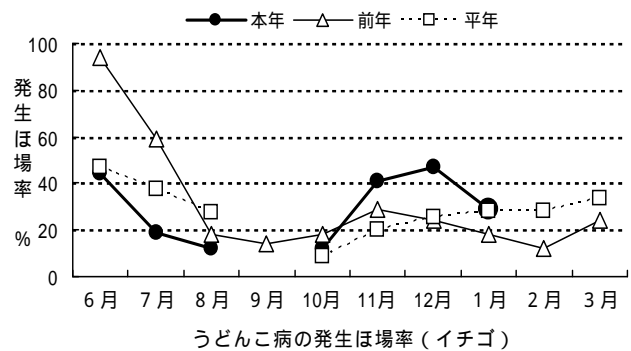
(イ) 発病葉や発病果などは早めに除去し、施設から持ち出して処分する。

(ウ) 発病を認めたら治療効果のある薬剤（平成22年度技術情報第16号(10月22日付け)；ホームページ掲載）を約7日おきに散布する。薬剤によっては感受性が低下している可能性があるため、散布後は防除効果を確認する。

(エ) 薬剤は、葉裏に十分かかるよう散布する。防除効果を高めるためには展着剤を活用する。

(オ) 窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作型 促成栽培

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率47%

(平年52%)：並

発生程度の高いほ場が見られる(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 寄生葉や摘葉した葉は、ほ場外に持ち出し処分する。

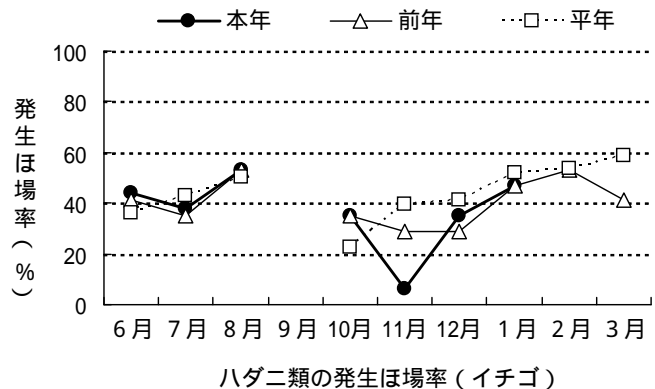
(イ) ナミハダニの発生が主体である。管理作業時に注意深く観察し、初期防除に努める。

(ウ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。

(エ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。

(オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(カ) 薬剤の使用にあたっては、ミツバチへの影響に注意する(農薬使用の手引き参照)。



5. 施設野菜共通

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, ピーマン
イチゴ

(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

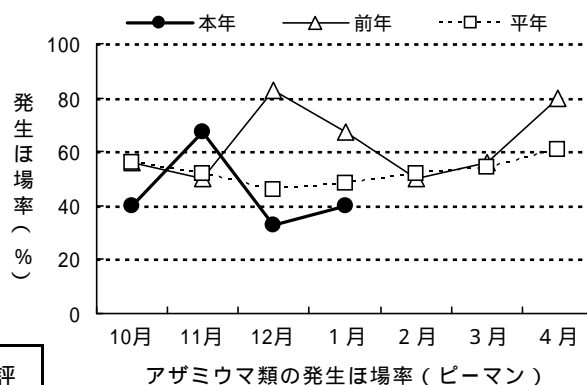
作物名	発生ほ場率(%)		概評
	本年	平年	
キュウリ	18	9	やや多
ピーマン	40	48	並
イチゴ	6	20	やや少

キュウリでの発生程度は低かった(-)

ピーマンで発生程度の高いほ場が認められた(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) キュウリにキュウリ黄化えそ病, メロンにメロン黄化えそ病, トマトにトマト黄化えそ病の病原ウイルスを媒介する。ハウス開口部(サイド等)等に青色粘着トラップを設置し, 早期発見と初期防除に努める。
- (イ) 本虫はピーマン, イチゴでは花や新芽の中, キュウリでは葉裏など薬剤のかかりにくい場所に生息するので, 薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) ピーマンのミナミキイロアザミウマは, 感受性が低下している薬剤もあるので, 薬剤の選定に注意する。
- (エ) スワルスキーカブリダニなどの天敵を放飼しているほ場では, 天敵に影響のない薬剤を選択する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け, 作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



(2) コナジラミ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, メロン, トマト
ピーマン, イチゴ
サヤインゲン(施設)

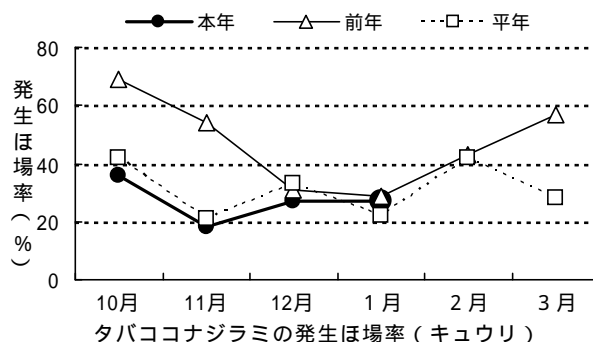
(ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

作物名	発生ほ場率(%)		概評	備考
	本年	平年		
キュウリ	27	22	並	タバコ
トマト	6	17	やや少	タバコ
ピーマン	7	21	やや少	タバコ
イチゴ	35	17	多	タバコ, イチゴ

イチゴで発生程度の高いほ場が認められた(+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) キュウリにキュウリ退緑黄化病, メロンにメロン退緑黄化病, トマトやミニトマトにトマ

ト黄化葉巻病の病原ウイルスを媒介する。生育初期にこれらのウイルス病が発生すると被害が大きくなるので、以下の点に注意して総合的な防除対策に努める。

a ハウスの開口部には必ず防虫網を設置する。

b 黄色粘着トラップを設置して早期発見・初期防除に努める。

c ウイルス発病株は伝染源になるので、疑わしい株も含め、見つけしだい除去し、ハウス外に持ち出して埋没処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。

(イ) サヤインゲンでは莢に白化症を、トマト、ミニトマトでは着色異常果を生じるので、早めに防除する。

6. エンドウ類

(1) アザミウマ類 (ハナアザミウマ主体)

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率14%

(平年17%): 並

(イ) 気象予報

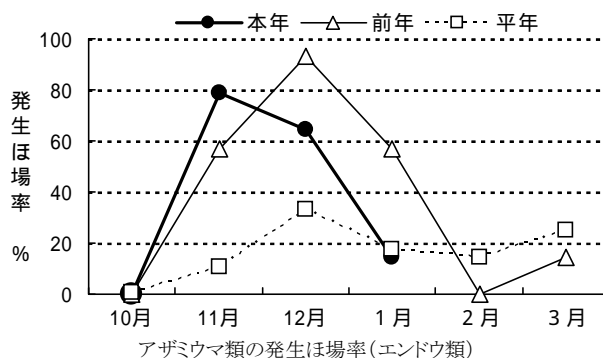
気温：低い(-)

降水量：平年並み

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ハナアザミウマは、花の中に生息するので薬剤散布は丁寧に行う。

(イ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



7. ジャガイモ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 奄美地域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率38%

(過去4年平年21%): やや高い(+)

(イ) 気象予報

気温：平年並みか低い(-)

降水量：少ない(-) 日照時間：平年並みか少ない(+)

(ウ) 徳之島でも疫病の発生・進展が認められる(農業普及課への電話聞き取り)(+)

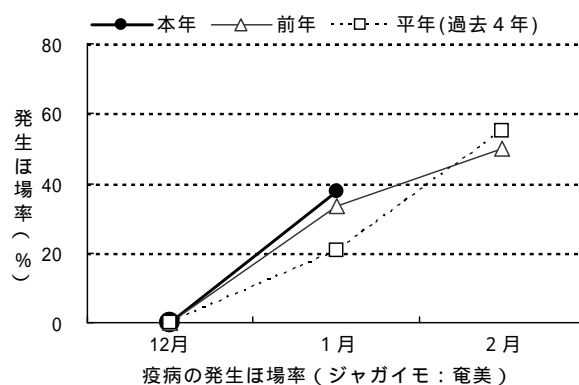
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 降雨が数日続くと発生しやすく、発病後は急速に病勢が進展するので、防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さないように注意する。

(イ) ほ場の見回りをを行い、発生が認められたら直ちに防除を行う。その後は、進展状況に応じて7~10日後に追加散布を行う。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(エ) 伝染源となる発病株や収穫残渣はほ場外に持ち出し、処分する。



防除に関する今月の留意事項

1. キュウリの植え替え作業時におけるアザミウマ類の防除について

キュウリのアザミウマ類は黄化えそ病の病原ウイルスを媒介する。

半促成作型での黄化えそ病の発生を未然に防ぐために、植え替え作業時における害虫防除を徹底する。

- (1) 抑制作型は収穫終了までの確な害虫防除を行う。
- (2) 収穫終了後は根を引き抜き株全体を枯死させる。
- (3) 中二重と外張りの間や谷下、暖房機の下などに生えている雑草は、ミナミキイロアザミウマの増殖源になるので引き抜きや除草剤散布などの対策を行う。
- (4) 雑草対策後はハウスを密閉し、蒸し込みを14日以上行う。
- (5) 定植時は必ず殺虫剤(粒剤)の植え穴処理を行う。

花き(キク)

(1) 黒斑病・褐斑病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土(施設): 並

奄美地域(露地): 並

イ 予報の根拠

< 県本土(施設) >

(ア) 調査結果 発生量: 並

発生ほ場率 9%

(平年 9%): 並

(イ) 気象予報

気温: 低い(-)

< 奄美地域(露地) >

(ア) 調査結果 発生量: やや多

発生ほ場率 75%

(平年 69%): 並

発生程度の高いほ場が認められる(+)

(イ) 気象予報

気温: 平年並みか低い(-)

降水量: 少ない(-)

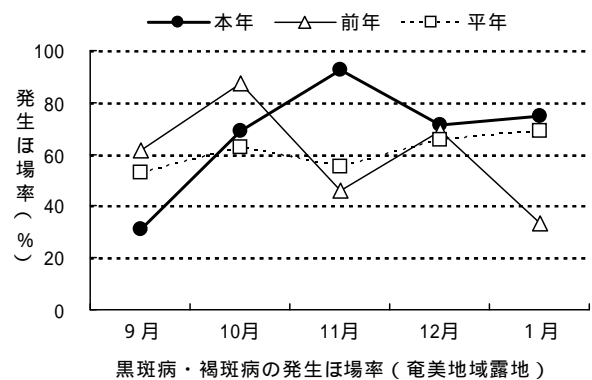
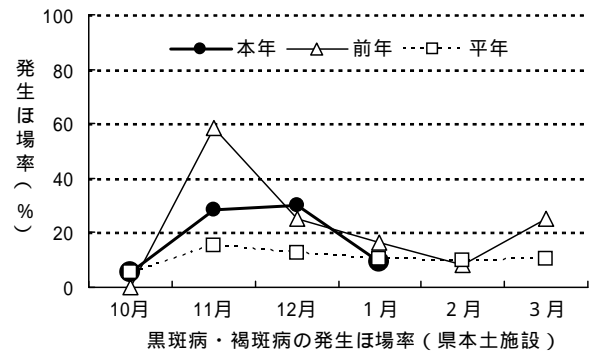
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 通風採光及び排水に努め、かん水は土が跳ね上がらないようにする。

(イ) 被害葉を除去する。

(ウ) 肥料切れ、窒素過多にならないようにする。

(エ) 病原菌は被害部で越冬するので、母株の予防散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土(施設): 少

奄美地域(露地): 並~やや多

イ 予報の根拠

<県本土(施設)>

(ア) 調査結果 発生量: やや少

発生ほ場率 0%

(平年13%): やや低い(-)

(イ) 気象予報

気温: 低い(-)

<奄美地域(露地)>

(ア) 調査結果 発生量: やや多

発生ほ場率25%

(平年24%): 並

発生程度の高いほ場が認められた(+)

(イ) 気象予報

気温: 平年並みか低い(-) 降水量: 少ない(+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) キクえそ病(TSWV), キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので, ほ場への侵入防止と早期発見及び初期防除に努める。地域での一斉防除は, 効果が高い。

(イ) 母株や苗の導入に際しては, アザミウマ類の寄生やウイルス感染に細心の注意を払う。

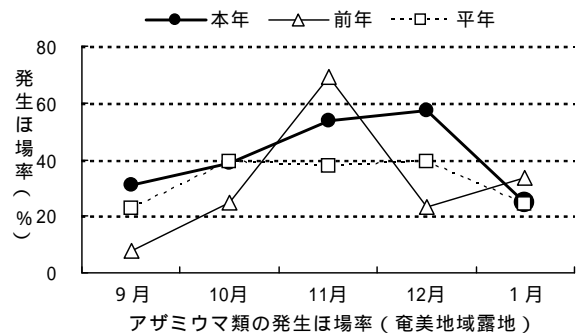
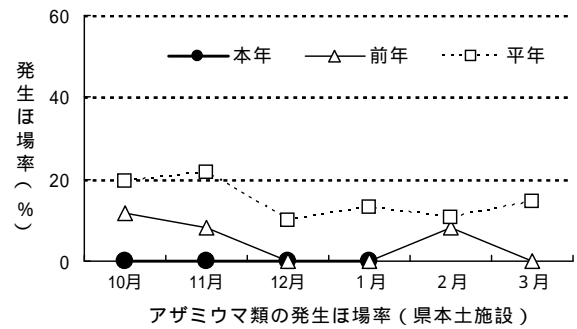
(ウ) 施設では開口部に目合い1mm未満の防虫網を張る。発生動向を把握するためには出入口や開口部付近での青色粘着シートの設置が有効である。

(エ) 除草等の環境整備を行うとともに, 母株の防除を徹底する。

(オ) 種によって薬剤感受性が異なり, 感受性が低下している薬剤があるので, 散布後は防除効果を確認する。発生種については「アザミウマ類の見分け方」を参照(ホームページ掲載)。

(カ) 同一系統薬剤の連用を避け, 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(キ) 栽培終了後は, 速やかに残渣を処分する。



茶 樹

(1) カンザワハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率40% (平年59%): やや低い(-)

寄生葉率1.0% (平年3.5%): やや低い(-)

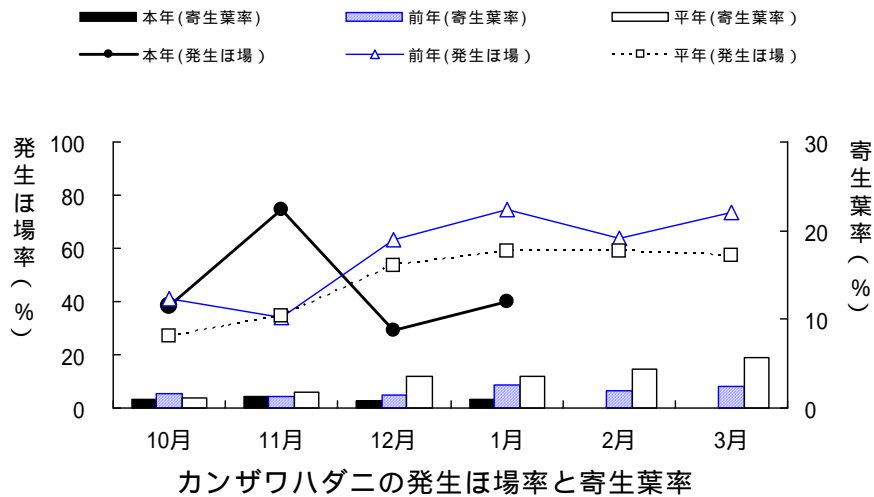
(イ) 気象予報 気温：低い(-), 降水量：並

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) ほ場を見回り，今後の発生に注意する。

(イ) 春期防除は，平均気温が10 を超える頃を目安に行う。

(ウ) 薬剤は，裾部・葉裏に十分かかるように留意する。



農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. 散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出しないよう十分注意する。
6. クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。

野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。

発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。

果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。

調査結果や気象予報等の末尾の（＋），（－）は，発生量の増加，減少要因を示す。

気象予報は，向こう1か月の長期予報。

平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年 ）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年 ）と表記する。